

第 127 回 親鸞仏教センター公開講座「親鸞思想の解明」資料 「浄土を求めさせたもの ―『大無量寿経』を読む―」

第 126 回 (2019. 11. 5) の要旨

拝読文(『真宗聖典』71～75 頁)

仏の言わく、「その四つの悪というは、世間の人民、善を修せんと念わず。転た相教令して共に衆悪を為す。両舌・悪口・妄言・綺語・讒賊・鬪乱す。善人を憎嫉し賢明を敗壞す。傍にして快喜して二親に孝せず。師長を輕慢し朋友に信なくして誠実を得難し。尊貴自大にして己道ありと謂えり。横に威勢を行じて人*072を侵易す。自ら知ること能わず。悪を為りて恥ずることなし。自ら強健なるをもって人の敬難を欲えり。天・地・神明・日・月に畏れず。肯て善を作らず。降化すべきこと難し。自らもって偃蹇(人偏が付く)して常に爾るべしと謂えり。憂懼するところなし。常に憍慢を懷けり。かくのごときの衆悪、天神記識す。その前世に頗る福德を作ししに頼りて、小善扶接し營護してこれを助く。今世に悪を為りて福德尽滅しぬれば、もろもろの善鬼神おのおの共にこれを離る。身独り空しく立ちてまた依るところなし。寿命終わり尽きて諸悪の帰するところなり。自然に迫促して共にこれに趣き頓るべし。またその名籍を記して神明にあり。殃苦牽引して当に往り趣向すべし。罪報自然にして捨離する從なし。但し前の行に得りて火鑊に入る。身心摧碎して精神痛苦す。

「仏の言わく、「その四つの悪というは、世間の人民、善を修せんと念わず。」

この念ずるという字を「おもう」と読んでいますから、善を修するということを思わないということ。五悪段にきてから、個人というよりも人間関係の中にいる人々それぞれが、というような意味合いで主語が言われています。第四悪も、世間の人民とありますから、例外なしにこういうことを人々がしてしまっているということでしょう。

この善ですが、仏教独自の善という概念があつて、それは、貪・瞋・痴という煩惱を起こさないということです。不貪・不瞋・不痴というような否定形で善ということが言われるのです。そういう意味で善ということは単に倫理的な関係だけではないわけです。この場合は、悪業を起こすことに対する善ですから、悪業に対する善業というような意味なのだろうと思われます。

「転た相教令して共に衆悪を為す。」

転を「うたた」と読んでいます。この場合は、段々に、というようなニュアンスが強くなっているのだらうと思います。教令ということで、お互いにそそのかし合う、あるいは教えあう、そういう形で、共に衆悪を為すわけです。我々は個人ではそのようにそそのかして相手に悪業をさせようなどと思っているわけではないはずなのですが、お互いに煩惱の身を生きているということが、結果的に周りの人々をそそのかして悪いことをさせてしまうということなのです。

「両舌・悪口・妄言・綺語」

口で起こす悪を口業、仏教読みで「くごう」といいます。そのなかで、両舌というのは、二枚舌のことです。違うことを平気で言うということを両舌というのです。

それから悪口というのは文字通り悪口です。とにかく自分のことではなくて、人のことを悪くいうわけです。悪口を言うと、それを伝え聞いた人は、また逆にその人を悪く言うので、お互いに悪口になるわけです。互いに教令しあうというのはそういう結果になることを言うのでしょう。

妄言ですが、妄語というのが一般的な仏教用語ですけど、ここでは妄言と言われています。仏教教団における妄言の定義は、覺りを開いてもいないのに、「私は覺った」と言

い張ることです。妄言というのは本人の頭がおかしくなるというよりも、相手をおかしくするというようなはたらきを持っている場合を言うのだらうと思います。人間は言葉に迷う存在ですから、言葉において作り事、なにか正しいと思わせるような、しかも皆それに騙されてしまうような語り方というものを妄言と言うのではないのでしょうか。妄ということは人々をたぶらかすというような意味を持つてくるのだらうと思います。

そして、最後の綺語というのは、要するに、ごまをすとか、おべんちゃらとかと言われるような、相手を持ち上げていい気にさせる、そういうような飾り言葉です。ほめるということが、相手を増長させるわけです。そういうはたらきをする言葉を綺語と言うのだらうと思います。

十悪と言われる殺生、偷盗、邪淫、妄語、綺語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、邪見の内、身で起こす、あるいは心で起こすということに対して、口の悪ということが妄語、綺語、悪口、両舌と四つ押さえられている。人間は言葉をもって社会を作り生きていますから、口によって人間関係が傷ついたり間違ったりするということがどうしても起こるのです。口の悪が四つ押さえられているということは、仏教が言葉が悪業を作るということに対して大変注意しているということだらうと思うのです。仏教は言葉の罪を大変重く見ていると言っても良いのかもしれませんが。

ですから、お釈迦さまは、八正道と言われた時には正語という、正しい言葉を使いなさいということをお教えられるわけです。そして正しい言葉というのは心が正しくないと正しい言葉になりませんから、意業、心が本当に大きな問題になるのです。

「^{ざんぞく}讒賊・鬪乱す」

他人の悪をまた他人に告げる、そういう告げ口をする人間のことを讒賊と言うらしいのです。鬪乱というのは、これは文字通り鬪って乱すということ、現代語では乱鬪と言いますが、集団で喧嘩するというような在り方を鬪乱というのでしょうか。

「善人を憎嫉し賢明を敗壞す。傍にして快喜して二親に孝せず。師長を輕慢し朋友に信なくして誠実を得難し。」

これは善とか賢とかいうこの世で価値とされているような生き方をしようとする人間を憎み嫉妬する。現実には分かり難い心理ですが、何かそういうことが起こるのかも知れません。賢明というのは、賢く明るいということです。そして敗壞ですから、そういう存在を無くそうとする動きのことなのでしょう。人間としてそういうことは、本当はあるべきではないのだけれど、我々凡夫には何かそういうふう動いてしまう心理を持ち合わせているわけです。

次の、傍にして快喜するという言葉は大変大事な言葉だと思います。賢、善という方向を持っている人を憎んだり壊したりする人を、傍から見て快喜するということです。快喜というのは、つまりやられているのを見ながら心の中で喜んでいるという、嫌な心理ですが、皆そういうものを持ち合わせているのだらうと思うのです。そして両親に親孝行をしないと。

師長を輕慢し、というのは、自分より先輩の人や自分の師を輕んずるということです。ここでは自分が高慢になって先生のことを輕んずるという、そういうようなニュアンスなのかも知れません。そして朋友ということは仲間ということですから、仲間に本当に信じられるというような人間になれない。そして、誠実を得難し、とありますが、これは本人が誠実というよりも友達から誠実な対応が得られないということをおもうとしているのだと思います。

「尊貴自大にして己道ありと謂えり。」

この言葉などは本当に痛い言葉です。こういうことをしながらも自分は尊い存在であると思っていると。傍からはとても酷いことをしていると見えても、本人は、尊い存在であ

と思っていると言うわけです。こういう言葉は鏡のような存在です。「経教は鏡の如し」という言葉がありますが、教えられている言葉は自分を照らす鏡なのだといういただき方をしないと教えが教えにならないのです。

「横に威勢を行じて人を侵易す。」

『大無量寿経』の中では、横という字が例外的に非常に大事な概念として使われるのですが、この場合は、邪という字を書いて、よこしま、というように、周りからはまっとうだとは思えないような形で、威張って威勢よくするということです。そして侵という字はおかすという意味を持つわけですが、易は、この場合は変えるという意味です。侵して相手を変え。人生を変えてしまうと言いますか、人が人の生活を変えようということもあり得るわけで、それを侵易という言葉で言っているのだと思います。

「自ら知ること能わず。悪を為りて恥ずることなし。」

自分がやっていることが分かってないから自ら知ることができない。能わずだから、知らないというより知ることができないということです。そして、この恥ずることなしということは、恥じて当然だと思うようなことをしながら、恥じることを知らないということでしょう。

親鸞聖人は、「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども」（聖典 P509）とおっしゃる。つまり自分は仏法を求め、本願に出会い、法然上人の教えを有り難いと思っ生きて抜いてきたと誇りにするのではなくて、その教えに照らされた自分が、「ああ、どこまで行っても煩惱具足だ」と、無慚無愧だともでおっしゃるわけです。それはこの三毒五悪段を我がこととして読んでおられるということだと思ふのです。

「自ら強健なるをもって人の敬難を欲えり。」

自分は身体が強い、心も強い、健康そのものだと言って、人からうらやまされたいということでしょう。敬難という言葉はわかりづらい言葉ですが、この場合の難は敬われることなど難しいのにうらやまされたいと思うという意味なのではないかと思ふます。

「天・地・神明・日・月に畏れず。」

自分を支えているのだけれども何か見えないような大きな存在、そういうものを怖れないということ。現代の人間はほとんどこういうものは感じていないから怖れてないわけでしょう。現代社会の在り方をこういう形で教えてくださっているのではないのでしょうか。

「肯て善を作らず。降化すべきこと難し。」

善をなそうとはあえてしないと。降化ということは、相手に頭を下げさせて相手を変えらるということ、それが難しいということです。人間というのは、自我があって、自我で生きていますから、その自我が頭を下げることを知らない、頭は下げているけれども、心の頭は下がっていないということでしょう。

「自らもって^{えんげん}偃蹇（人偏が付く）して常に爾るべしと謂えり。」

偃蹇という熟語でおごり高ぶるさまを表わす言葉のようです。自分で高ぶって常に当然であると思っている。こういう傾向が人間にはどうしても強くあります。

「憂懼するところなし。常に憍慢を懐けり。かくのごときの衆悪、天神記識す。」

無明によって、心がうっとうしくふさがれているような在り方から来る悲しみのようなものが、憂いという言葉で言われているのだらうと思ふのです。懼は、懼れるという文字です。憂い懼れる。こういう心が普通は起こるのだけれど、これが起こることがない。

橋慢の橋は自分でおごり高ぶる、慢は比較して驕り高ぶる。こういうことが、橋慢という事です。そして、そのように生きてしまっていることは、見えない天地神明というものがちゃんと知っているのだということです。

「その前世に頗る福德を作ししに頼りて、小善扶接し營護してこれを助く。今世に悪を為りて福德尽滅しぬれば、もろもろの善鬼神おのおの共にこれを離る。」

たまたま人間に生れたということは、それは前世にそれなりのことをしたから人間に生れたのだと教えるわけです。これはインドに以前からあった六道流転の考え方で、必ずしも仏教の考え方ではないのですが、それを取り入れている。そして、人間として生きている時にこういう悪業を犯してしまうと、前の命で作った善の効果が消えて、次の命で人間にはもう生れることは出来ない、そういうふうに見えるのです。

「身独り空しく立ちてまた依るところなし。寿命終わり尽きて諸悪の帰するところなり。自然に迫促して共にこれに趣き頼るべし。」

この場合の空というのは、周りに頼るべきものがないということです。

天親菩薩のお作り下さった『浄土論』に「空過」という言葉があります。親鸞聖人の御和讃に「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき」（聖典 P490）とありますが、親鸞聖人は阿弥陀如来の大悲に出遇ったということ自体が十分な意味を与えてくださっているとおっしゃっています。本願力と出遇うことは、現生で十種の利益を感じるということでもあるし、「願生彼国 即得往生」、願生すればそのまま往生したと言える人生なのだ、といういただき方をすることなのです。

そして、悪業の結果、その結果を自分が引き受けざるを得なくて、空しく独りで死んで行く。そこに依るべきものはない。それが悪業の結果なのだということです。

次の自然は業道自然です。迫促というのは、もうとにかく時間がなく、このまま死んで良いのかと迫られるということです。

「またその名籍を記して神明にあり。殃苦牽引して当に往り趣向すべし。罪報自然にして捨離する徒なし。」

それは自然の道理の中にきちんと記されているわけです。そして牽引、とにかく引っ張られて、ひとりでにそちらに行くようになっていくのだと。捨て離れるということではなく、罪の報いは必ず来る、それが自然の道理、業道自然の道理なのだということです。

「但し前の行に得りて火鑊に入る。身心摧碎して精神痛苦す。」

火鑊というのは地獄の鬼がもっている三叉です。源信僧都が『往生要集』に地獄の段を描いています。限りなく恐ろしいことですが、鬼は罪人を何度も生き返らせて、終わることのない苦しみを与え続けるわけです。火鑊に入るということは、そういう鬼の餌食になると言うようなことでしょう。

身心摧碎の摧も碎もくだくという意味の字です。身ももちろん碎かれるけれども、心も碎かれる。精神とここで言われていますが、身や心というものを抛り所にする精神というのは少しわかりづらい。魂という言葉があります。一般的に自分というものを成り立たせている根拠を、魂という言葉で教えられています。それを使うならば、鬼によって身体と心が粉碎されてしまうほどの痛みと悲しみを受け、魂自身も痛みを覚えるのだと、こういう表現ではないでしょうか。

編集担当：大谷一郎（親鸞仏教センター嘱託研究員）